

梶原父子の栄光

佐伯真一

梶原父子、特に景時といえ、今では悪役と相場が決まっている。しかし、『平家物語』諸本では、必ずしもそうではない。『平家物語』で梶原景時が悪役として描かれるのは、主に義経との逆櫓論争から腰越状の前後にかけてのことである。延慶本では宇治川先陣における佐々木高綱の敵役として、梶原源太景季が悪役化されているが、多くの諸本ではそれはさほど顕著なことではない。むしろ、一ノ谷合戦における「二度懸^{じどのかげ}」で、「もののふの取り伝へたる梓弓引いては人のかへるものかは」

の歌を残し、真つ先駆けて敵陣に突入する平次景高(異本によっては景季)の姿や、敵陣に突入して一度は引き上げた後、長男の景季の行方が知れないので、「源太うたせて命いきても何かせん」と、決死の覚悟で再び敵陣に突入する景時の姿が目立っているというべきだろう。景時は、勇敢で強く親子の情愛にも富む、武士の父親として理想的な姿に描かれ、その子供達も立派な姿を見せているのである。さらにその後、読み本系の諸本(延慶本・

長門本・源平盛衰記・四部合戦状本・源平闘諍録)では、梶原景季または景時が、箆に梅あるいは桜を差して戦ったとする逸話を載せている。謡曲「箆」の原話である。

この話は異本によって違いが多く、謡曲が『平家物語』のどの異本によったのかは、よくわからない。主人公は謡曲では景季で、延慶本・長門本・四部合戦状本も同じだが、源平闘諍録では景時、源平盛衰記はややあいまいだが景時と読める。また、箆に差した枝は謡曲では梅であり、神戸の生田神社にもある「箆の梅」として有名だが、延慶本・四部合戦状本・源平闘諍録では桜であり、「もののふの桜狩りこそよしなけれ」(源平闘諍録)といった句を含む連歌が詠まれている。一方、源平盛衰記・長門本では謡曲と同じ梅だが、長門本は「桜狩り」の句をも含んでいて、梅と桜が混在する混乱ぶりである。長門本の混乱や、「もののふの桜狩り」という素材を扱う連歌が『沙石集』第五末や『菟玖波集』巻一に見える点などから考えて、おそらく、桜が本来である

うか。若武者景季が箆に桜を差して戦い、風が吹くたびに、あるいは馬を走らせるたびに、その桜がはらはらと散るといふ、戦場らしからぬ風雅な情景が演出されているわけである。

このように、『平家物語』には、梶原氏に対する肯定的造型と否定的造型が共存している。それはたとえば、木曾義仲の叙述に、英雄的な造型と田舎者としての戯画化とが共存しているように、多くの素材を継ぎ合わせて編集した『平家物語』という作品の宿命であるといえよう。肯定的側面と否定的側面は、いずれも、物語作者の創作というよりは、現実の梶原氏に根を持っているものと考えられる。

梶原氏は著名な鎌倉党の坂東武士だが、景時は文官的な才能にも優れていた。たとえば、『吾妻鏡』寿永三年(一一八四)正月二十七日条。東国勢が義仲を討ったという知らせが、続々と鎌倉に到着した。安田義定・源範頼・源義経・一条忠頼らが、各々飛脚を飛ばして報告したのである。ところが、少しだけ遅れて到着した景時の飛脚だけは、敵の誰を討ち取り、誰を生け捕ったかに関する名簿を持参していた。他の使者は誰も、そうした正確な記録を持っていなかったのに比べ、景時の思慮はすばらしいと、頼朝は感服したという。坂東武士としての由緒正しい家柄に加え、こうした事務官僚的な能力によって、景

時は、頼朝側近としての地位を築いたのであろう。また、梶原父子には和歌の才があった。『吾妻鏡』文治五年(一一八九)七月二十九日条には奥州征伐で白河の関を越える際の景季の歌、同年八月二十一日条には津久毛橋で景高が詠んだ歌、同年十二月二十八日条には無量光院の供僧助公の歌にまつわる景時の話など、梶原父子の和歌の逸話がある。また、源平盛衰記では、箆の梅の話の後に、景時が頼朝と交わした連歌の逸話を二つ記しているが、類似の話は、『沙石集』米沢本卷五末や『菟玖波集』卷一四『増鏡』二『新島守』、真名本『曾我物語』卷五にも見える。「箆」の逸話が事実であるとは考えにくい。梶原氏にはこうした風雅の逸話を残す素地があったわけで、『平家物語』諸本、とりわけ読み本系諸本は、そうした梶原氏の一面をとらえ、好意的に描き出しているのである。

だが、事務的能力や和歌的教養は、頼朝には気に入られただろうが、東国の武士たちの間で評価されたかどうかは疑問である。たとえば、『吾妻鏡』建久三年(一一九二)十一月二十五日条によれば、所領をめぐる訴訟で久下直光と対決した熊谷直実は、弁論で勝てず、「梶原景時が久下直光をひいきするから俺は勝てないのだ」と言い捨て、文書を投げ捨てて席を蹴り、逐電したという。頼朝の側近で弁論にたけた景時と、弓矢を取れば勇猛果敢だが口下手な直実——どちらが坂東武士の心

情に近いかといえ、やはり直実の方ではなかったか。頼朝が正治元年(一一九九)正月に没すると間もなく、景時は鎌倉の武士たちから排撃される。『吾妻鏡』同年十月二十七日日条によれば、三浦義村は、「およそ文治より以降、景時が讒によりて命を殞し、職を失ふの輩、勝^あけて計^かふべからず」と述べ、翌日には景時を弾劾する連署状に六十六人もの署名が集まった。翌年正月、頼朝の一周忌の直後に、梶原一族は上洛しようとしたが途中で襲われ、滅亡するのである。頼朝の側近として情報を集めては武士たちの賞罰の認定に当たった景時は、頼朝にとってはきわめて便利な存在だったのだろうが、武士たちの目には嫌な奴だと映ったことは想像に難くない。讒言者・梶原というイメージにも、十分に現実的な背景があったわけである。

しかし、その滅亡は悲劇であるにせよ、それだけで終わってはいれば、文学の世界における梶原氏は、毀誉褒貶はあるものの、それなりに芳名を残す一族ということになったかもしれない。ところが、梶原氏にとって運が悪かったのは、その後、義経人気が高まり、それと裏腹の関係で、梶原景時が悪役化されていったことである。その傾向は既に『平家物語』に見えるが、先にも述べたように、『平家物語』では、「讒言者・景時」は未だ梶原氏の一面に過ぎない。だが、室町文芸の世界では、義経は絶対的な英雄と化していった。しかも、

その世界では、義経を悲劇の英雄とする一方、義経を討った頼朝は、その責任を問われないケースがほとんどである。たとえば、幸若舞曲「合状」では、義経は自分の口の中に、自分の真情を訴え、景時の讒言を告発する書状を隠して死ぬ。首実検の場でその書状が読み上げられると、事実を何も知らされていなかった頼朝は泣き崩れ、直ちに景時を誅したと描かれる。頼朝はイノセントな王者であり、悪いのはすべて君側の奸・景時であるという、王者を免罪する論理が働いているのである。それは、現世の悪や穢れを王に負わせない、天皇制にも似たシステムの発動であるといえるようか。そこですべての責任を負って悪役化されるのが景時であった。そうしたシステムにより、梶原氏は室町時代から江戸時代を通じて、悪の権化のごとくに描き続けられるのである。

だが、「合状」においても、父や弟が誅される中で、景季は、「度々の高名」により命だけは助けられたと描かれる。その「高名」とは、佐々木高綱との先陣争いであったか、一ノ谷での奮戦であったか、あるいは「箆」の風雅な功名であったのだろうか。さらに後世、浄瑠璃や歌舞伎の世界では、景季は『ひらがな盛衰記』の主人公として有名になる。それは、文武に優れた坂東武士・梶原父子の栄光の、最後の残照といふべきだろうか。

(青山学院大学教授)